

交通・ことば・固有名

——李良枝「由熙」を読む——

米倉伸哉 YONEKURA Shinya

1. 由熙から「私」へ

1981年、ソウル大学国語国文学科に入学した李良枝は、当時ソウルを訪れていた中上健次のすすめによって、小説「ナビ・タリョン」(1982.11)を書き上げる¹。ふたりの兄の死、両親の離婚訴訟、年上の男性たちとの性愛、〈母国〉の伝統文化への傾倒、留学といったデビュー作における主題は、その後も「かずきめ」(1983.4)「あにごせ」(1983.12)「刻」(1984.8)において、その重心を変化させながら幾度も反復される。そして、1988年『群像』11月号に掲載された小説「由熙」によって、李良枝は、第100回芥川賞を受賞することとなる。

李良枝が執筆を行ったのは、「ナビ・タリョン」発表から死去までの10年間に限られ、『李良枝全集』(全1巻、講談社、1993年)に収録された作品は、12作品にすぎない。それらを発表順にみれば、本稿で分析対象とする「由熙」は11作目にあたる。

李恢成につづいて、在日朝鮮人作家としては2人目の芥川賞受賞者となった李良枝の作品は、文芸時評や評論の場で積極的に取り上げられてきた。「由熙」について、「韓国人の側から在日韓国人を見るという……複眼の思考は、在日韓国人、朝鮮人の文学の流れの中では確実に新しい」²と評した中上の評言は代表的だが、リービ英雄・温又柔といった、いわゆる「越境」作家たちによる作品評もまた、李良枝作品の読解を方向づけているように思える³。

一方で、李良枝作品への学術的分析が活発に行われるようになったのは、90年代後半に差しかかってからのことだ。まずは、先行研究の志向を概観することで、残された課題を捉えたい。

李良枝研究の志向は、おおよそ次のように発展してきたように思われる。90年代、李良枝の死去と時を同じくして進展したのは、〈在日〉の記憶・記録として作品を読む傾向である。ここでは、在日朝鮮人である作家の民族的／言語的アイデンティティが、それぞれの作品においてどのように表出し、あるいは昇華されたか、他の〈在日〉文学との比較をまじえて論じられてきた。評伝にも近い形式で著された評論や学術論文に明らかなのは、李良枝という、夭折した一人の作家の個人史として作品を読解する姿勢である⁴。言い換えれば、李良枝作品の価値・根拠を「作家」とい

う存在に回帰させることが、基本的な姿勢として堅持されてきたとも言えよう。

その後、〈在日〉文学研究とは異なる角度から李良枝作品を照射する動きが高まることとなる。すなわち、語りの構造や登場人物のジェンダーといった要素をもとに、作品を内在的に分析する姿勢である。ナラティブの問題をとってみれば、「ナビ・タリョン」における〈在日〉女性の一人称による語りは、作者・李良枝の語りと不可分であるとみなされてきたが⁵、以後の作品においては、同様の主題を扱いつつも、登場人物の性別や立場は緻密に組み替えられてゆくことが指摘されてきた⁶。李良枝作品を通時的にあつかうそうした研究では、登場人物の民族意識といった主題は、性や暴力など他の主題と同様に、作品世界を構成するひとつの要素として分析対象化される。

それでは、「由熙」という単一の作品を読み解くにあたり、どのような課題が残されているのだろうか。金燠我は『在日朝鮮人女性文学論』（作品社、2004年）において、「ナビ・タリョン」「刻」「由熙」を「留学三部作」として位置づけ、一作ごとに変化する主人公の母国への葛藤をそのうちに見ようとする。一作品の読解にとどまらない巨視的な視点を導入した金燠我の論考は、つまり、「ナビ・タリョン」「刻」という布石の上に「由熙」を置きつつ、作家自身の留学体験とそれぞれの作品の主人公たちとの「距離」を測定しようとするものだ。しかし、「留学三部作」という枠組みは重大な問題を孕んでいる。「ナビ・タリョン」「刻」では、日本から韓国へと留学する在日朝鮮人女性が物語の語り手を担っているのに対して、「由熙」では韓国人女性である「私」が語り手を引き受けているからだ。主人公による「母国への留学」というテーマに視座をおくことはたしかに重要だが、作品のナラティブを軽視すれば、作品世界の出来事を作家自身の経験に紐付けようとする陥穽にはまることは避けがたい。

むろん、「由熙」を筆頭に、単一の作品を対象とした研究・批評の蓄積には参照すべきものが多くあることも事実だ⁷。なかでも渡邊英理は、「由熙」について、由熙が目覚めの瞬間に発する「アー」という音の物質性に着目する。本来、日本語では「あ」、韓国語では「아」として体験されるはずの音が、由熙にとっては「言葉にならない言葉」としてあらわれることを述べたうえで、渡邊は、李良枝が音を発する身体に注意を向けていることを指摘する。ジュディス・パトラーの『触発する言葉』を引くことで渡邊が示すのは、言葉によって受けた傷は、身体的次元を抜きには語りえないということだ。由熙の身体に及ぶ「言葉による傷」とは、例えば韓国語を話す際に、母語として慣れ親しんだ日本語とは異なる口蓋や声帯の使用を求められることでもたらされるものだ。しかし、さらに渡邊が強調するのは、パトラーの議論においては他者による憎悪や侮蔑をふくんだ言説が「言葉による傷」を

もたらずとして問題化されているのに対し、由熙の傷とは、発話主体として由熙自身をすらふくむ、言語そのものが背負う歴史性やシンボリックな意味によってもたらされるということだ⁸。

渡邊の読解によって、私たちは、由熙が体験したことの内実（渡邊が言うところの「傷」）を、「アイデンティティ」や「民族意識」といった（すでに多くの論者によってパターン化されてしまった）言葉を介さず、よりテキストに沿って語りなおすことができる。ここでさらに検討を加えなくてはならないのは、由熙との出会いによってもたらされた、語り手である「私」の変化だ。「由熙」における「私」は、メタフィクション作品における語り手のごとく、作品世界を統べる全能の存在ではない。であれば、テキストには、ひとりの登場人物である「私」の反応が刻み込まれるはずである。大学の試験以外では韓国語を読もうともしない由熙に「私」がぶつける怒りは、その一例にすぎない。

本論の主たる目的は、内的焦点化されている「私」が作品内でもつ役割を明らかにすることにある⁹。加えて、由熙が発する「ことば」の性質を記述し、「私」がナラティブの次元においてそれらに如何に呼応したか明らかにすることも目指されている。

2. 言語と交通

ここで「由熙」のあらすじを確認したい。在日同胞の少女・由熙は、韓国のS大学に進学するが、下宿先を何度も変え、結局、「私」と叔母の住む家に紹介でたどり着く。由熙は「私」と叔母を姉や母親のように慕い、「私」も同様に由熙と心が通じ合う感覚を覚えるが、由熙は家以外の韓国社会に決して順応せず、大学の試験以外ではハンゲルを読み書きしようとすらしめない。由熙のそうした態度に「私」は怒りをぶつける。由熙は結局大学を卒業することなく日本語で埋め尽くされた原稿用紙の束を「私」に託し、日本に向かう。

本節では、小説「由熙」における語り手の位置、および作品のナラティブがもつ特徴を確認する。まずは、思想家・竹田青嗣による「由熙」評を引用したい。

だが主人公〔由熙——引用者〕のこの“引き裂かれ”のかたち、……苦しみを自分のうちに掘るのではなく、他者の視線に訴えて預けてしまう弱さといったものを受けとる。まさにそれゆえに『由熙』は、モチーフの上で『刻』から後退していると感じられるのだ。

……

わたしが言いたいのは、つまり、作家はこの作品で、〈在日〉同胞の固有の苦しみをほぼそのまま受け取ってくれる虚構上の「理解者」（「私」や叔母——引用者）を作り出し、その“証言”を通じて〈在日〉のアイデンティティ不安を読者に訴えている、ということである¹⁰。[傍点は引用者による]

つづいて竹田は、叔母や「私」といった「理解者」の存在は、在日朝鮮人の不幸を受けとめる日本人読者の像と「びたりと重なる」と述べている。そしてだからこそ、叔母や「私」の存在が、由熙のアイデンティティをめぐる切実な状況を描くには不适当であると断じる。言い換えるならば、由熙の「訴え」を読者に伝達し、「理解」へと促すことが、読者の代表である叔母と「私」の機能である、と竹田は考えているようだ。こうした竹田の評言は、由熙の置かれた複雑な状況が、「私」や叔母によって理解されているという点において、妥当だ。韓国社会への同化を求める「私」も、由熙がふたつの言語の間で分裂を抱えていることは理解しているからだ。しかし私たちは、小説の構造をつぶさに観察することによって、「私」の「理解」が届かない場所が、テキストには書き置かれていることを確認することができる。

由熙に対して一定の理解を示してきた「私」が、それでも理解し得なかったのは、日本語で埋め尽くされた原稿用紙の束である。それは、由熙が抱えこんできた苦しみの記録であると言ってもよい。原稿用紙448枚にもおよぶ膨大なテキストを、しかし、「私」は内容まで理解することができない。知っている漢字を辿りながらも、そこから内容をすくい取ることは困難だ。由熙の書いた文章が、日記なのか、エッセイなのか、小説なのかすら判別できない私は、わずかに知っている「あ、い、う、え、お。」の音を、由熙の声を想起しながら呟くことができるのみである。書きつけられた文字に由熙の姿を見てとる「私」が、「文字に引きつけられながらも、……奥歯を噛みしめたくなるような、不快で、腹立たしい感情を抑えられずにい¹¹るのは、由熙への「理解」から溢れるものがテキストに現出していることの証左にほかならない。

同様に、由熙が韓国語で書いた文字であっても、「私」の理解できる範疇にあるとは言えない。ひとりで酒を飲み酩酊した由熙は、乱れた文字で「우리나라 (母国)」とノートに書きつける。そして、ノートの紙をまとめて数枚めくったのち、「사랑할 수 없습니다. (愛することができません)」と書きはじめる(429-430)。これら二つの言葉は、一見つながりを持っているかに思われるが、そうとは限らない。由熙は「우리나라」に助詞(ここでは「를」)を付していないだけでなく、そこには数ページの隔りがあるからだ。つまり、「사랑할 수 없습니다」という言葉は、目的語を持たないことで宙づりにされ、由熙の「訴え」を形成することはできない。「由熙の

日本語に対するこだわりは、韓国語からの反動という風にはとても思えなかった」(443)という、「私」の割り切れない感情は、由熙が愛することのできない対象が、明確に「우리나라(母国)」（あるいは〈母語〉）であると規定できるのであれば、生起しないものだろう¹²。

以上を踏まえるだけでも、語り手である「私」が、俯瞰者や読者の分身として作品内にあらわれているわけではないことを示すのに、十分であるかもしれない。だが、由熙と語り手が接する個別具体的な場面の分析にとどまらず、作品のナラティブの構造を観察することで、主張のさらなる裏づけとしたい。

本作において、物語の語り手である「私」は、由熙との出来事を、(二人の最初の出会いからすれば)半年という月日を経て回想している。読者のみる由熙とは、語り手がまさにその瞬間目にしている対象ではなく、「私」の記憶のなかから呼び起こされたイメージにはかならない。由熙と「私」とのやり取りが、けっして時系列的にではなく断片的に描かれるのは、それが、由熙の部屋を訪れたさいの「私」の感情や叔母との会話をとおしてはじめて克明に想起こされるからだ。

この小説が回想形式であることとともに重要なのは、小説「由熙」の読者は、「私」による韓国語の一人称の語りによって、はじめて物語に触れることができる、という点だ。すでにここにはいない由熙についての回想として物語が語られること、由熙の発していた／書いていたはずの日本語から意味が剥がれ落ちてしまうこと——時間とことばによる二重の隔たりを介して、この小説は読者の前に差し出されているのだ。岡真理は、この感覚を的確に言い表している。

日本語で書かれている、私が理解できる言葉で書かれているはずのその証言、その文字の果てしない連なりは、しかし、それを言葉として読み得ない韓国人の「私」の頭のなかに由熙の血の滲んだような声を喚起するだけで、私には、何の意味も伝えてはくれない。……母語なる言語が、意味を媒介するものではなく、意味伝達を阻害するものとして立ち現れる瞬間。母語なる日本語、テクニクの日本語を理解してしまうかぎりにおいて、日本語で書かれた由熙の言葉を、私(たち)は理解できない¹³。[傍点は引用者による]

「우리나라」と「사랑할 수 없습니다」が断片化され統一的な意味を成さないこと、そのことにも増して重要なのは、意味を伝達する基盤そのものが、小説テキストに欠けていることだ。

しかし同時に見逃してはならないのは、作者もまた、この枠組みから排除されているということである。作者が、「私」の視点をもとに日本語で小説を書くとき、

その行為のうちには、「私」の韓国語の語りを日本語に置き換えるという、〈翻訳〉に近い営為が加わるはずである。順に考えてみれば良い——由熙はほとんどの時間、日本語で思考している。そのさまを「私」は韓国語で過去のこととして回想する。作者は、「私」の韓国語の語りを日本語のコンテキストに引き入れる。こうした語りの構造は、おなじ日本語を母語とするはずの由熙と作者とのあいだに言語の隔たりをもたらず。つまり、由熙が日本語で文章を書いた（あるいはことばを発した）としても、それが一度「私」によって受けとられた以上、作者がそこから本来のコンテキストを抽出することは不可能なのだ。由熙に対する作者の位置は、由熙に対する「私」の位置にくらべて、明らかに後退しているのであり、「私」と同様、作者もまた、竹田の言うような「理解者」として由熙の境遇に寄り添うことはできない。

本節の議論によって明らかとなったのは、小説「由熙」が、韓国語を母語とする「私」による一人称の語りによって構成されていながら、その語り手が、由熙の境遇を読者に伝えるという先行論における読解とは反対に、由熙とのコミュニケーションの不可能性を抱えているばかりでなく、（作者をもふくむ）日本語読者への意味内容を伝える回路を遮断する働きを持ちあわせていることだ。

本節で扱った事項がコミュニケーションにおける「交通」や「言語空間」の問題であったとするなら、続いて重要になるのは、そのような空間で交わされる「ことば」がどのような（意味内容ではなく）機能を果たしているのか、という問いだろう。

3. 文字・発話・音

第3節では、2つの場面の分析をとおして「由熙」に現出することばを具体的に考察する。上田敦子は「〈文字〉という「ことば」——李良枝『由熙』をめぐる」（『日本近代文学』第62集、2000年）において、小説「由熙」を構成することばが、「書く、読む、聞く、話す」などの機能に区別され描かれていることを指摘したうえで、作品内に現れることばを「音（音声）」と「文字」に分節化して議論を展開している。日本語と韓国語の差異に拘泥する既存の枠組みを批判した点上田論の成果は揺るぎないが、私たちはここで、「由熙」においては、「ことば」という語に複層的な意味が託されていること、それはなにも言語（ラング）に直接的に結びつくものばかりではないことに留意したい。たとえば、由熙がカセットデッキから流す大等の音色と由熙の発話とでは、同じ音声でありながら、その性質はいくらか異なっているように思える。そのため、上田論のように作品内の枠組みをそのまま議論に転用するのではなく、異なる概念化が必要とされるだろう。ここでは、「由熙」におけることばを、「文字（エクリチュール）」「発話（パロール）」「（意味を与えられていない）音」

に分節し議論を展開する。

まず着目したいのが、由熙と「私」がバスにのって机を買いに行く場面だ。待ち合わせ場所の喫茶店からバス停までの道は「想像以上に混雑して」いて、「鋭い冷たさを含んだ風」によって「轟音も、人声も、風に吹きまくられ、かえって音量を増し」てゆく。「一言も口をきかなく」なった由熙はバスに乗っても、「視線は動かず、表情もな」い。運転手がラジオのボリュームを上げると、由熙は「音を拒絶し、声をはねのけて」しまう。「私」を安心させるように微笑みかける由熙だが、物売りの男がバスに乗りこむと、由熙は両手で耳を塞ぎ、声を出して泣き出してしまう(420-423)。

バス運転手のラジオのボリューム、物売りの乗車によって極限を迎える由熙の拒絶反応だが、身体をとおして顕在化される反応は、「私」と喫茶店で待ち合わせ、バス停に向かうまでの人混みのなかですでにあらわれているものでもある。重要なのは、由熙の反応の変化だ。バス停でバスを待っているあいだ、由熙は、「私の声も聞こえていないように」日本語を呟き続ける(421)。溢れかえる韓国語のなかで、そこから逃れるように日本語を発しつづける由熙だが、由熙を傷つけるのは、日本語／韓国語を問わず、発話という行為(そしてそれを聴くという行為)そのものがつねにすでに抱え込む「意味づけ」である。

私たちは普段、「アー」というひとつの音が、もしかするとほかの言語の音列につらなる文字であるかもしれないという可能性を捨象している。そのことではじめて〈母語〉という領域を措定し、他者とコミュニケーションをとることが可能になる。しかし、由熙にとっての〈母語〉とは、そのようなアプリアリなものでは決してありえない。金石範のいうように「……日本語は単なる異国語だということだけではなく、そこに支配の爪痕をもったことば」¹⁴であるかぎり、日本語を自明の〈母語〉とすることもできなければ、国境を隔てた異国の言語として韓国語をとらえることも、由熙には困難なのだ。ふたつの言語が対峙するとき、由熙はそのいずれか一方を選択することを強く求められることで、一層つよく引き裂かれてしまう。そのため、由熙の抵抗は発話を離れることとなる。

運転手が、ラジオのボリュームを上げた。……

気づくと、由熙は目を閉じながらうつむき、唇を硬く噛んでいた。何かに必死に耐えているという様子だった。(422) [傍点は引用者による]

由熙が選ぶのは、溢れかえる韓国語のなかで日本語を呟くことをやめ、自身の発話そのものを押し殺すことだ。同様のことは、ほかの場面にもみられる。ティオス

ギ(分かち書き)ができないことで「私」に苛立ちをぶつけられた由熙が「奥歯を何度も噛む場面(418)をはじめ、テキストには口蓋や喉といった、発話をつかさどる身体部分が幾度となく描写され、そのたびに何らかの発話が抑制されているさまが看取できる。

パロールの抑制は、エクリチュールの登場を準備する。しかし、ここで私たちが注意を向けるのは、なにも「文字(エクリチュール)」ばかりではない。見逃してはならないのは、「書くという行為(エクリチュール)」そのものである。

ここで重要となるのが、由熙が日々の生活を送る「部屋」だ。由熙にとって、トネルの自室は、自分ひとりの時間を手にすることのできる物質的な領土であると同時に、日本語／韓国語それぞれのことばが生成される空間でもある。特に後者の意義は大きい。由熙が448枚におよぶ原稿用紙に日本語の文字を書きつくしていたのは、部屋に置かれた机の上だからだ。「みんなが話している韓国語が、……催涙弾と同じように聞こえてならない」由熙にとって、自室の机こそが、発話されることばの波から遠ざかり、文字／書くことへと逃避することのできる唯一の場所なのだ¹⁵。

このことを踏まえて検討したいのは、「私」が「真夜中に由熙の部屋から響いてくる……鈍い音に起こされ」る場面だ。「私」は、「ハナ、トゥル、セッ、ネッ(いち、に、さん、し)、と聞こえてくる音を数えながら、ベッドから飛び起き、廊下に出て「由熙の部屋のドアを叩く。部屋には酩酊状態の由熙が「ぐんなりとして壁に背中をもたれさせて」いる(428)。前節で論じた、由熙が「사랑할 수 없습니다.(愛することができません)」とノートに書きつける場面も同様の箇所だが、ここでは異なる観点から読解を行う。

「廊下に沿った壁の、間隔を置いて並んでいる二つのドアの右側の方」(406-407)の部屋に下宿することになった由熙は、部屋にいるときには、「右肩を壁の角に押しつけ」、「机と二つの壁の角とカセットデッキとによって」、からだを「はさみこむように……し、自分で自分を部屋の隅に押しこんで」生活している(428)。そして、「あの日も由熙はここにいて、私も机と壁にはさまれたこの空間の中にいた」(430)のだという。

由熙の部屋は、文字が生成される空間にほかならないが、ここでは、(意味を与えられていない)音が生成される空間へと変質する。「鈍い音」に気づいて「私」が由熙の部屋に入ると、「小さく、大笏の散調がカセットデッキから聞こえていた」。「由熙は、床に落としていた右手を上げ、ぶらぶらとその右手を振り、机の上を叩いた」。「言いたい言葉を眩こうとして思いとどまるように」する由熙は、この間、一言もことばを発してはいない(428-430)。この場面で由熙は、カセットデッキから大笏

の音を流したり、自身の体を打ちつけることで音を出したりしながら、ノートにハングルを書いている。「大笏の散調」は、歌詞を持たないインストゥルメンタルだ。体を壁や机に押しつけることで発する「鈍い音」もまた、その音じたいが何かを表しているわけではない。同時に由熙は、音を鳴らしながらハングルを書くのである。このとき由熙は、特定の意味やコンテキストを持たない音楽や打撃音を鳴らすことで、自身の書くハングルから意味を引きはがしていると言えるのではないだろうか。

すでに述べたとおり、由熙は満員のバスの車内で、「唇を硬く嚙」むことでその時間を耐え抜こうとするのだが、口を閉じるという行為は、同時にもうひとつの働きをもっている。

——笛は一番素朴で、正直な楽器だと思うって、由熙は言った。口を閉ざすからだって、口を閉ざすから声が音として現れる、とも言っていたわ。こういう音を持って、こういう音に現れた声を、言葉にしてきたのがウリキョレ（我が民族）だと、ウリマルの響きはこの音の響きなんだと、由熙は言ったわ。(441)

[傍点は引用者による]

ここで「こういう音」「この音の響き」と言うとき、由熙は、音としての韓国語のうちに、自身が身を委ねるべき〈母語〉を見いだそうとする。そしてそれは、「口を閉ざす」ことではじめて獲得されるものだという。つまり、自身の身体が黙することを通して初めて発される音があることに、由熙は、そして「私」は思い至るのだ。

バスの車内と部屋。2つの場面の帰結は非常に似通っている。机を買いに行く場面では、由熙は「声を出して泣」き(423)、部屋で音を鳴らしながら文字を書く場面では、「涙をすす」り「嗚咽を上げ」ることで、ことばのもつ象徴性が徹底して排除される。この帰結は、言い換えるなら、由熙自身がひとつの楽器になっていると言っても良い。このとき由熙は、声を出して泣くことによって、自身の聴覚のおよぶ範囲から、ことばを排除しようとしている。

本節では、テキスト内で「ことば」と名指されているものを「文字(エクリチュール)」「発話(パロール)」「音」の三つに分節することで、それらが互いにどのように関係しているのか分析した。このようにしてみれば、当初は日本語／韓国語による文字、発話としてテキストに現出していた「ことば」が、それぞれの場面の終局部では、音に変質していることが分かるだろう。言い換えるなら、文字や発話の段階ではシニフィエがことばの内実を占めていた一方、ことばの性質が音に移りかわる場面で、意味が剥がれ落ちたとも言うことができる。

4. 意味の空隙

続けて目を向けたいのが、テキストに現れる固有名である。2008年に刊行された『立命館言語文化研究』19巻3号には、「由熙」という人物の名称に着目した2名の発表原稿が収められている。まず、寺下浩徳は、小説テキストのうちに「由熙」「由熙ユヒ」「ユヒ」という三つの表記が、加えてあとがき「言葉の杖を求めて」には「유희」というハングル表記が現れていることに着目する。そこから寺下は、本来は「ありのままの個人である」はずの「ユヒ」を、在日朝鮮人の「由熙」として疎外する日本社会の暴力性、同胞の「유희」として順応を強いる韓国社会の暴力性を指摘する¹⁶。寺下論は、着眼点の独創性こそ認められるが、あとがきにのみ登場する「유희」という表記を用いて作品を分析する、という手続き上の難点を抱えているようにも見える。一方の藤井たけしは、朝鮮語の「유희」という単語が、日本語の「遊戯」に等しい意味を持っていることを挙げ、作品（ひいては単行本『由熙』）を作家による戯れとして読み解こうとする。単行本『由熙』が「由熙」だけでなく、一見して日本の出来事と読める「来意」「青色の風」を取めていることに加えて、「青色の風」の末尾が「おかしくてしかたがない」という一文で締めくくられていることが根拠として挙げられている¹⁷。

先行論では、「由熙」という名前の表記（あるいはその解体）に関心が向けられたが、ここで私たちが注目したいのは、「李由熙」という登場人物の女性の名前であり、その語が固有名詞である、ということだ。このとき、テキストにおいて固有名詞によって名指されている人物が由熙だけであるということは、重大な意味をもつ¹⁸。

『現代言語論——ソシュール、フロイト、ウィトゲンシュタイン』（新曜社、1990年）において、立川健二は、固有名詞がほかの品詞に対してもつ特徴を次のように説明している。ここでは大きく3点に整理したい。

1. 一般概念としてのシニフィエをもたず、個物や個人を直接的に指示すること。
固有名詞は〈シニフィエなきシニフィアン〉であり、空虚なシニフィアンである
2. ほかの記号との相互関係で価値づけることができず、言語（ラング）のうちに安定した位置をもたないこと。そのために固有名詞は翻訳不可能である
3. 固有名詞はシニフィエをもたないが、シニフィアンを有するため「記号」であることに相違はない。そのため、その穴を充填すべくあらゆるシニフィエが押し寄せてくる。このとき、固有名詞は意味生成の拠点となる¹⁹

本論の議論に即して言えば、「私」や叔母に対する呼称(「オンニ」「アジュモニ」「あなた」)とは異なり、「由熙」という固有名は、ほかの誰かに向けてもちいることはできない。それは意味をもたず、直接に由熙を指示することができるのみだ。前節で取り上げたのは、主として由熙が発することばの脱-意味性であったが、ここで確認したいのは、「私」がテキスト内で、由熙を「由熙」と名指し続けることのもつ働きだ。「由熙」という語は、ほかの語との相対的な意味の関係で規定することができず、言語(ラング)のなかで安定した位置をもたない。つまり、「私」が「由熙」と名指すたびごとに、その呼びかけは、特定の「意味」や「言語」の軛から由熙を解放する。たとえそれが言語をまたいで「由熙」「ユヒ」「Yuhi」「유히」と〈翻訳〉されたとして、それは「表記」の問題にすぎない。

「名」あるいは「名づけ」を言語の本質においたのは、「言語一般および人間の言語について」におけるヴァルター・ベンヤミンであった。柿木伸之は、ベンヤミンの言語哲学のうちに「言語そのもののうちにディアスポラへ向かう動きを見届け……言葉を交わしながら他者とともに生きる可能性を見いだそうと」する姿勢を看取する²⁰。柿木は、「固有名は人間の音声となった神の言葉である」というベンヤミンの言葉を経て、次のように述べている。

その意味で、子どもに固有名を与え、その名を呼ぶことは、その特異な存在に対する応答であり、呼ばれる名はけっして恣意的ではありえない。しかもこのことは、名づけること、名を呼ぶことすべてに通底する。言語の本質が「名」であること、それは「固有名の理論」から考えられなければならない。そこにあるのは、一つひとつの存在の超越性を受け容れ、その特異性に応答する、最初の呼びかけとしての発語の理論なのだ²¹。[傍点は引用者による]

柿木は、ことばを発するという行為のうちに、他者の声を聴きとることが内在していることに注意を向ける。そしてそれが、究極的には「存在の肯定」となりうるのであり、他者や事物とのあいだに、応答を可能にする回路を用意するのだと言う。小説テキストに戻りたい。

——お名前は？

私は訊いた。

——イ・ユヒと言います。

学生は答えた。

どんな漢字を書くのか、と続けて訊いた私に、李由熙、と字を教え、学生は

どうしたわけなのか照れ臭そうに薄く笑い、うつむいた。(406)

この瞬間から「私」は、(一部の代名詞の使用を除けば)由熙との会話の次元でも物語のナラティブの次元でも「由熙」という呼称をつねにもちいている。そしてそれは、このテキストがいかなる言語(ラング)に置き換えられようともテキストの場に繰り返し現前する「意味」の空隙を与えるのである。

……由熙の二種類の文字が、細かな針となって目を刺し、眼球の奥までその鋭い針先がくいこんでくるようだった。

次が続かなかった。

叶の余韻が喉に絡みつき、叶に続く音が出てこなかった。

音を捜し、音を声にしようとしている自分の喉が、うごめく針の束に突つかれて燃え上がっていた。(450)[傍点は引用者による]

小説の結末において「私」の目は、由熙そのものの視線をあびるかのように文字を受けとめ、「私」の喉は、〈母語〉なる韓国語の発話をこれまでのように行えなくなる。このとき「私」は、ドゥルーズのいうように、「自らの発話において吃るのではなく、言語活動^{ランガージュ}それ自身で吃るので」あり、「自分自身の言語^{ラング}において外国人のよう」な立場に立たされている²²。つまり、瞬間的な言い淀みとしてことばを発しづらくなっているのではなく、所与であり自明であるはずの〈母語〉の安定性(由熙が言うところの「ことばの杖」)を見失いかけているのだ。〈母語〉をひとつの閉塞した言語体系と捉えていた「私」は、由熙のことばの使用によって、加えてほかならぬ自らが「由熙」という固有名を繰り返し発話・想起することによって、〈母語〉との共約不可能性を自分自身に刻みつける。

5. 「どうしてもない距離」の先に

本論では、既存の李良枝研究が軽視してきた「由熙」のナラティブの構造を議論の起点として重視した。加えて、テキストに現前する種々のことばを「文字」「発話」「音」に分節化するとともに、ことばの現出と対比的に見落とされてしまう、「黙する」という行為に意味づけを行なった。さらには、由熙のことばの使用にとどまらず、「私」の語りの行為がテキスト全体を脱-意味化していることを述べた。

第100回芥川賞の選考会において、古井由吉は次のように述べている。

李良枝氏の「由熙」は、言語に悩む人間の描出に一面からまともに立ち向かって、読み甲斐のある作品であった。……暗誦を以って把握に替えなくてはならぬ言語の窮地は、じつは同国語の村にあっても、言語上の異邦人の立場になくても、無縁の地獄ではないのだ。……しかし最後の部分で、在日韓国人の言語分裂の根もとへ、一人の生粋の韓国人を、仮構とは言いながら、人物さながら取りこんでしまった。これがあるために私はこの価値ある作品を、韓国語のために日本語のために、授賞作としては採らなかった²³。[傍点は引用者による]

物語にのみ着目してみれば、古井の読解が正鵠を射るものであることに疑いはない。しかし第4節での議論から明らかなように、古井の言う「言語分裂の根もと」とは、由熙が「私」に対し一方的にもたらしたものではない。由熙と「私」がテキストにちりばめたことばは、それぞれが体系的な言語(ラング)の使用からは逸脱する動きを孕んでいるはずだ。

小説テキストには、3回にわたって「由熙は遠かった」という表現が登場する²⁴。由熙が自分の知らないときに書いてきた日本語の文字に「私」が感じてしまう「どうしようもない距離」は、物語内容を通して乗り越えられることはなかった。けれど、由熙に刻みこまれた「言葉による傷」(渡邊前掲論)が「私」にとっても「無縁の地獄ではない」のならば、小説「由熙」は、埋めがたい距離の先に他者の経験を分有する回路を準備しているのである。

付記

本稿は、李熙健韓日交流財団「韓国研究次世代フェロシップ事業」の助成を受けた研究成果の一部である。

[注]

- 1 中上健次「輪舞する、ソウル。」(『中上健次全集8』) 219頁
- 2 中上健次「文芸時評」第2回(『中上健次全集15』) 688頁
- 3 リービ英雄『日本語を書く部屋』ほかを参照されたい。また、温又柔は『李良枝セレクション』の編集と解説をつとめている
- 4 こうした研究のひとつの集大成として、趙允珠「李良枝研究——民族的アイデンティティを超えて」が挙げられる。本論で趙は、李良枝作品の読解の方途を、李良枝自身の民族意識や〈母国〉体験に積極的に求めている
- 5 高森楓「李良枝作品研究」ほか
- 6 たとえば、辻山ゆき子「在日コリアン二世・三世の文学に観る『母なるもの』と『父なるもの』——梁石日、李良枝、鷺沢萌から」143-151頁

- 7 「由熙」以外の李良枝作品を単独で扱った研究に、君島朋幸「李良枝『除籍謄本』論」、渡邊澄子「李良枝の文学世界——突然死による未完作『石の聲』に徴して」（新・フェミニズム批評の会=編『昭和後期女性文学論』）などがある
- 8 渡邊英理「第3章 言葉」（三原芳秋・渡邊英理・鶴戸聡=編『クリティカルワード 文学理論 読み方を学び文学と出会いなおす』）83-87 頁
- 9 ジュエール・ジュネットは、それまで「視点」という語で語られていた小説におけるパースペクティブの問題に対して、人間の視覚性を取り除いた「焦点化」という用語を提起し、テキストが作中の登場人物の知覚を採用して物語世界を喚起する方法を「内的焦点化」と呼んだ（『物語のディスクリール』）。いささか古典的ではあるが、ここではジュネットの定義に従い「内的焦点化」という語を用いる
- 10 竹田青嗣『〈在日〉という根拠』301-302 頁
- 11 李良枝「由熙」（『李良枝全集』所収）425 頁。特記のないかぎり、以下の李良枝作品の引用は、『李良枝全集』に拠るものとし、（ ）に頁数のみを記すこととする
- 12 本論では、内的焦点化されている「私」のテキストにおける機能にとくに着目したが、ナラティブを考えるうえで、叔母の存在も軽視することはできない。上田敦子は、自分には伝えられなかった由熙の苦悩を聴きとる存在として叔母に着目し、由熙への自身の眼差しを相対化する契機が叔母によって与えられたと述べている（「〈文字〉という「ことば」——李良枝『由熙』をめぐる」）
- 13 岡真理「私、「私」、「私」……M/other's Tongue(s)」（『棗椰子の木陰で』）100-101 頁
- 14 金石範『新編「在日」の思想』131 頁
- 15 ここで、二人がバスに乗る場面に立ち返っても良い。二人は、由熙の使う机（ライティングデスク）を買うためにバスに乗った。だとすれば二人は、途中のバス停で降りてしまうことで、机を買いそびれたことになる。言い換えるなら、机を買うことの失敗はすなわち、文字を書く場所の獲得に失敗することと同義である。文字／書くという行為は、テキストにおいて、獲得しがたいものとして、あるいは獲得されたのちも不安定なものとして繰り返し描出されている
- 16 寺下浩徳「つけられたいくつもの名前——李良枝『由熙』をあとがきから読み直す——」（『立命館言語文化研究』19 卷 3 号）105-108 頁
- 17 藤井たけし「帝国の養女の里帰り」同書、94 頁
- 18 語り手である「私」は、由熙からは「オンニ」、叔母からは「あなた」と呼ばれるほか、一人称のナラティブのなかで自身の名を呼ぶことがない。一方の叔母は、由熙から「アジュモニ」と呼ばれ、「私」のナラティブのなかでは「叔母」と呼ばれる。つまり、「私」と叔母はいずれも普通名詞によってテキスト上では呼ばれているのだ
- 19 立川健二・山田広昭『現代言語論——ソシュール、フロイト、ウィトゲンシュタイン』（100-108 頁）を参照されたい。また、三つ目の特徴はやや晦渋であるが、先述の藤井論は、作品に登場する由熙から「유식」という朝鮮語の音韻を抽出し、「遊戯」という当初のコンテキストから外れた意味を生成しているとも言える
- 20 柿木伸之『ベンヤミンの言語哲学——翻訳としての言語、想起からの歴史』186 頁
- 21 同書、128 頁
- 22 ジル・ドゥルーズ＋クレール・パルネ『ディアローグ——ドゥルーズの思想』14 頁
- 23 古井由吉「芥川賞選評（第 100 回）」455 頁
- 24 具体的には以下の箇所である——「しかし、由熙は遠かった」（425）、「しかし、由熙はやはり遠かったのだ」（427）、「あの日も、やはり由熙は遠かったのだ」（428）

【参考文献】

- 『芥川賞全集 第14巻』文藝春秋、1989年
李良枝『李良枝全集』講談社、1993年
上田敦子「〈文字〉という「ことば」——李良枝『由熙』をめぐる」『日本近代文学』第62集、2000年
岡真理『褒椰子の木陰で』青土社、2006年
温又柔=編『李良枝セレクション』白水社、2022年
柿木伸之『ベンヤミンの言語哲学——翻訳としての言語、想起からの歴史』平凡社、2014年
君島朋幸「李良枝『除籍謄本』論」『文化/批評』第9号、大阪大学国際日本学研究所、2018年
金石範『新編「在日」の思想』講談社、2001年
金堯我『在日朝鮮人女性文学論』作品社、2004年
ジェラルド・ジュネット『物語のディスクール』花輪光+和泉涼一訳、水声社、1985年
新・フェミニズム批評の会=編『昭和後期女性文学論』翰林書房、2020年
高森楓「李良枝作品研究」『東アジア——歴史と文化』24号、新潟大学東アジア学会、2015年
立川健二・山田広昭『現代言語論——ソシュール、フロイト、ウィトゲンシュタイン』新曜社、1990年
竹田青嗣『〈在日〉という根拠』筑摩書房、1995年
竹村和子『愛について——アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店、2021年
趙允珠「李良枝研究——民族的アイデンティティを超えて」早稲田大学大学院文学研究科博士論文、2018年
辻山ゆき子「在日コリアン二世・三世の文学に観る『母なるもの』と『父なるもの』——梁石日、李良枝、鷺沢萌から」『共立国際研究：共立女子大学国際学部紀要』第32号、2015年
ジル・ドゥルーズ+クレール・パルネ『ディアローグ——ドゥルーズの思想』江川隆男+増田靖彦訳、河出書房新社、2011年
トリン・T. ミンハ『このなかの何処かへ——移住・難民・境界的出来事』小林富久子訳、平凡社、2014年
中上健次『中上健次全集8』集英社、1996年
——『中上健次全集15』集英社、1996年
ヴァルター・ベンヤミン『ベンヤミン・コレクション1』浅井健二郎+久保哲司訳、筑摩書房、1995年
三原芳秋・渡邊英理・鶴戸聡=編『クリティカルワード 文学理論 読み方を学び文学と出会いな
おす』フィルムアート社、2020年
寄川条路=編『インター・カルチャー——異文化の哲学』晃洋書房、2009年
リービ英雄『日本語を書く部屋』岩波書店、2011年
立命館大学国際言語文化研究所=編『立命館言語文化研究』19巻3号、立命館大学国際言語文
化研究所、2008年
鷺田清一『「聴く」こと力——臨床哲学試論』筑摩書房、2015年
渡邊一民『〈他者〉としての朝鮮——文学的考察』岩波書店、2003年
이양지『유희』삼신각、1989년
Yi, Christina, *Colonizing Language: Cultural Production and Language Politics in Modern
Japan and Korea*, New York: Columbia University Press, 2018.